

ベルギー研究会 会報

発行日:2013年1月15日

創刊号(電子公開版)

Japanse vereniging voor
de studie van België

Association japonaise
d'études belges

Japanische Vereinigung für
Belgische Studien

—目次—

会報刊行にあたって	1
これまでの研究会	1-6
ベルギー現代小説翻訳準備会	6
研究発表要旨	6-11
ベルギー関連刊行物リスト	12-14
2013年の活動予定・募集	15

会報刊行にあたって

ベルギー研究会が設立されたのは2007年8月。ベルギーつながりで交流のあった4人での食事会がそのはじまりでした。その後、会員は徐々に増え、2012年12月の時点でその数55名に達しました。

通常は兵庫県で例会を開いていますが、2011年8月には島根県で合宿、2012年3月には初めてブリュッセルで研究会を実施、また、入会希望者が関西にとどまらず全国に広がっている現状を受け、2012年12月には初めて東京での研究会開催を実現しました。今後も会員どうしが身近に顔を合わせられるよう、基本的には関西をベースに活動を継続しますが、一年に数回は関西以外の場所でも研究会を開催する予定です。

本研究会ではこのたび年一回(もしくは二回)、会報を発行するはこびとなりました。今回は創刊号ということで、2007年創設以来の活動記録をメインに掲載いたします。次号からは会員のコラムの掲載なども計画しておりますので、依頼させていただく際はご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

これまでの研究会

ベルギー研究会では現在、1、2カ月に1回のペースで、ベルギー関連の研究発表を中心に、読書会、合評会、映画鑑賞などもおこなっています。

以下が2012年12月末までの時点で実施された計42回の研究会の記録です。

第1回(準備会)

日時:2007年8月4日(土)

場所:Beer Café de BRUGGE(三宮)

第2回

日時:2008年5月15日(木)

場所:La Bruxelloise(元町)

第3回

日時:2008年6月29日(日)14:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【読書会】Hugo Claus (1950) *De Metsiers, De Bezige Bij*

(紹介担当:岩本)

【映画鑑賞】“De Leeuw van Vlaanderen”(1985年)

第4回

日時:2008年7月21日(月)14:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】石部尚登「方言の視点から見たベルギーの言語政策史」

【映画鑑賞】“KASSABLANKA”(2002年)(紹介:井内)

別会(美術鑑賞)

日時:2008年8月3日(日)

場所:姫路市立美術館

【美術鑑賞】コレクションギャラリー「ベルギー象徴派の画家たち」

【美術鑑賞】「アメデオ・モディリアーニ展」

第5回

日時:2008年8月30日(土)14:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】井内千紗「ブリュッセルにおけるオランダ語メディアの所在一

FM Brusselを例に」

【映画鑑賞】“Les Aventures de Till l’Espiegle” (1956年)

【解説】岩本和子「シャルル・ド・コステル『ウーレンシュピーゲル伝説』について」

第6回(ベルギー美術研究会と合同開催)

日時:2008年10月18日(土)

場所:姫路市立美術館講堂

【講演】高瀬晴之「ベルギーのシュルレアリスム」

第7回

日時:2008年12月13日(土)

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】岩本和子「ベルギーのフランス語文学とくフランス文学」

第8回

日時:2009年2月8日(日)14:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】今中舞衣子「フランス語教育におけるくことば」とく文化くベルギー、フランス、EU、そして日本の事例から」

【映画鑑賞】テレビ映画“Manneken-Pis: l’enfant qui pleut” (2008年) (紹介:今中)

第9回

日時:2009年3月15日(日)14:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】正躰朝香「ベルギー政治の不安定化と連邦制『非領域性原理』の後退から考える」

【映画鑑賞】『ティル・オイレンシュピーゲルの冒険』(1956年) (紹介:岩本)

第10回(ベルギー美術研究会と合同開催)

日時:2009年4月5日(日)14:00

場所:姫路市立美術館講堂

【講演】高瀬晴之「20世紀のベルギー美術―フランドル表現主義と抽象、現代あたりを中心に―」

第11回

日時:2009年6月21日(日)13:00

場所:西宮市プレラホール会議室

【発表】石部尚登「果たしてベルギーは「多言語国家」か? ―領域性原理と地域別一言語主義と言語的不寛容と」

【発表】寺尾智史「多言語主義に向かう南部アフリカ―アンゴラ言語政策研究の予備的考察」

第12回

日時:2009年7月20日(月・祝日)13:00-17:00

場所:西宮市プレラホール会議室

【発表】鈴木義孝「西洋言語学史と品詞分類および文法概念について」

【発表】加来奈奈「16世紀前半平和条約におけるネーデルランド「大使」に関する考察―1529-30年ネーデルランド総財務収支勘定簿を中心に―」

第13回

日時:2009年9月13日(日)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センター講義室2

【発表】中條健志「フランスの「若者」はどのように語られたか?―「郊外」での「暴動」をめぐる」

【読書会】ウォルター・E・J・ティップス(2009)『シヤムの独立を守ったお雇い外国人―フランスの砲艦外交と国際法学者ロラン＝ジャックマンの闘い』小川秀樹訳、岡山大学出版社 (訳者による解説付き)



第14回

日時:2009年11月8日(日)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センター講義室2

【講演】Ekyalongo Bo Lawele Roudy Chiminch「コンゴ民主共和国をめぐる文化」

【発表】荻田弥生「フランス滞在の総括、EU域内の国境を越えた自治体間協力について」



第14回研究会

第15回

(主催:神戸大学大学院国際文化学研究所異文化研究交流センター (IReC)、協賛:ベルギーフランドル交流センター、関西ベルギー研究会)

日時:2009年12月11日(金)17:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【講演】ベルナルド・カトリッセ(ベルギーフランドル交流センター館長)“Energizing Europe: the importance of the Regions and the case of Flanders”

第16回

日時:2010年1月23日(土)14:00-18:00

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】三宅拓也「近代日本の陳列所とベルギー:原型としてのブリュッセル商業博物館」

【映画鑑賞】“Stupeur et tremblements” (2003年) (紹介:岩本)

第17回

日時:2010年2月16日(火)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センターセミナー室1

【発表】三田順「ヴラントレン象徴主義文学について」

【発表】星元佐知子「EUにおける自治体の活躍ーカタルーニャ州の対外政策からー」

第18回

日時:2010年4月25日(日)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センターセミナー室2

【発表】出口馨「近代日本におけるメーテルランク及びベルギー象徴派の受容について(詩分野を中心に)」

【発表】井内千紗「ブリュッセルにおけるローカリティの生産とその変容ーアフリカ地区、マトングを事例にー」

第19回

日時:2010年5月23日(日)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センターセミナー室2

【発表】石部尚登「ベルギーで「言語戦争」の後にもたらされたもの」

【映画鑑賞】“Pallierter” (1975年) (紹介:岩本)

第20回

日時:2010年7月25日(日)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センター講義室1

【発表】田母神顯二郎「アンリ・ミショーとベルギー」

【発表】小林亜美「スタンダールの小説と絵画」

第21回

日時:2010年8月28日(日)13:30-17:30

場所:西宮市大学交流センターセミナー室2

【発表】矢追愛弓「フェルナン・クノップフ作《愛撫》試論」

【発表】鈴木義孝・井内千紗「フランデレンにおける現代オランダ語文学」

第22回(京都ドイツ語学研究会との共催)

日時:2010年9月25日(土)13:30-17:30

場所:キャンパスプラザ京都6階 京都産業大学サテライト第2講習室

【発表】石部尚登「ベルギーのゲルマン語圏とその『方言』観」

【発表】黒沢宏和「古高ドイツ語『タツィアーン』における翻訳手法—dixerit: 直説法未来完了形か接続法完了形か—」

【発表】檜枝陽一郎「韻文から散文へ—『ライナールト物語』韻文版および散文版の比較—」

第23回

日時:2010年11月28日(日)13:00-17:00

場所:西宮プレラホール 会議室

【発表】利根川由奈「ベルギーのシュルレアリスムにおけるパロディ」

【読書会】Hugo Claus (1950) *De Metsiers, De Bezige Bij*

第24回

日時:2011年1月30日(日)13:30-17:30

場所:神戸大学国際文化学研究所

【発表】井内千紗・岩本和子「「フランデレンの獅子」をめぐって」

【映画鑑賞】“De Leeuw van Vlaanderen” (1985年)

【読書会】Hendrik Conscience (1838) *De Leeuw van Vlaanderen*

第25回

2011年3月21日(月)13:30-17:30

神戸大学国際文化学研究所

【発表】溝口知宏「ベルギーとEU経済の課題」

【映像鑑賞】TVドキュメンタリー“TO BE OR NOT TO.be: La collection qui donne envie d'être belge/ Een reeks die je warm maakt voor België” (2010年) (紹介:井内)

第26回

日時: 2011年4月24日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室1

【読書会】Jean-Philippe Toussaint (2006) *La Mélancolie de Zidane*, Editions de Minuit

【映画鑑賞】「浴室」(1989年)(紹介: 岩本)

【発表】野崎次郎「フランスとアメリカ新自由主義への傾斜？」

【発表】狩野麻里子「ベルギーのアートマネジメント教育と実践」

【発表】井内千紗「修辞家集団(rederijkerskamer)について」

【発表】寺尾智史「社会言語学とは何か？—吉田喜昭『ドングドンとことだま大王』(1976、アリス館)からの再検証」

第27回

日時: 2011年5月15日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室2

【発表】狩野麻里子「ベルギー美術とベルギー王立美術館研修の報告」

【合評】石部尚登(2011)『ベルギーの言語政策—方言と公用語—』大阪大学出版会(コメンテーター: 寺尾智史・岩本和子)



第28回

日時: 2011年6月25日(土) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室1

【発表】伊勢晃「アポリネールとベルギー」

【発表】井内千紗「フランデレンの文化政策」

【総会】

第29回

日時: 2011年7月31日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センター

【報告】鈴木義孝「フランダース文学翻訳セミナー(7/14-18)について」

【ベルギー現代小説翻訳準備会】今中、的場、三田、板屋

第30回(第1回研究会合宿)

日時: 2011年8月20日(土)-23日(火)

場所: サロン・ド・ゆきみーる(島根県大田市)

【発表】石部尚登「地域語と学校: ベルギーのある自治体における新しい試みから」

【発表】鈴木義孝「「ベルギー」について—辞書での表記を中心に—」



第30回研究会
(合宿)

第31回

日時: 2011年9月25日(日) 13:30-17:30

場所: 神戸大学国際文化学研究所

【発表】野崎次郎「Lara Fabianとベルギー的なるもの」

【ベルギー現代小説翻訳準備会】鈴木[義]、岩本

第32回(関西EU多文化共生研究会との共催)

日時: 2011年10月23日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室2

【発表】木戸紗織「多言語社会ルクセンブルクにおける言語使用—領域を手がかりとして」

【発表】石部尚登「ベルギーにおける言語政策と言語の領域性認識の関係」

【発表】大場茂明「ハンブルク・ザントパウリにおける地区再生—衰退地区からトレンディ・エリアへ—」

第33回

日時: 2011年12月25日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室1

【発表】加来奈奈「16世紀平和条約における南ネーデルランドが担う“仲介国家”についての考察—1529年カンブレ平和条約施行における交渉人ジャン・ド・ル・ソーの機能—」

【読書会】Hugo Claus (1983) *Het verdriet van België, De Bezige Bij*

第34回

日時: 2012年1月29日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室2

【発表】中筋朋「メーテルランク的一幕劇にみる19世紀末のく劇の質的变化—「日常の悲劇」と筋の内面化をめぐって—」

【発表】的場寿光「ラウル・セルヴェ『タクサンドリア』—「偽りのイメージ」から「運動=イメージ」へ—」

第35回(ベルギーでの研究会1回目)

日時: 2012年3月7日(水) 13:30-17:30

場所: 神戸大学ブリュッセルオフィス

【発表】三田順「カーレル・ヴァン・デ・ウースティネとヴラーンデン・アイデンティティ」

【発表】井内千紗「19世紀後半ブリュッセルにおけるフランデレン文化の振興—王立フランデレン劇場設立をめぐって—」

【発表】ハネ・オスティン「現代ベルギーにおける〈tussentaal〉について」



第35回研究会
(神戸大学ブリュッセルオフィス)

第36回

日時: 2012年4月29日(日) 13:00-17:00

場所: 西宮市プレラホール会議室

【発表】大迫知佳子「ベルギー王立図書館『F.J.フェティスコレクション』所蔵の資料について」

【発表】今中舞衣子「ポール・オトレの思想とムダネウム」

【発表】正躰朝香「ヨーロッパにおける多様性の『尊重』と『管理』」

【翻訳】プロジェクト現状報告

第37回

日時: 2012年5月27日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センター講義室2

【発表】野崎次郎「ベルギーと言語戦争 La Guerre des Langues en Belgique」

【発表】石部尚登「ベルギーのドイツ語話者とその領域」

第38回

日時: 2012年7月16日(月・祝) 13:00-17:00

場所: 西宮市プレラホール5F会議室

【合評】利根川由奈「ベルギーの現代美術における「ベルギーの特質」の表象—社会と芸術との関連から—」

【合評】井内千紗「文化行政および「フランデレンの波」にみる文化概念の差異と統合」

【合評】狩野麻里子「ベルギーのアート・マネジメント教育—ULBの事例を基に—」

【合評】三宅拓也「近代日本における商品陳列所の受容—ブリュッセル商業博物館からの学習と展開—」

【合評】中條健志「OIF(フランコフォニー国際組織)とベルギー」

第39回

日時: 2012年7月29日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室2

【合評】石部尚登「ワロン語の標準化—方言学者と復権運動家の同床異夢—」

【合評】三田順「カーレル・ヴァン・デ・ウースティネにおける「ヴラーンデン性」—モーリス・マーテルランクを手掛かりとして—」

【合評】田母神顯二郎「断片とパッセージ—アンリ・ミショーとベルギー—」

【合評】加来奈奈「16世紀前半ネーデルラントの統一と渉外活動—1529年カンブレ平和条約履行における交渉人ジャン・ド・ル・ソーの機能—」

【合評】岩本和子「シャルル・ド・コストル『ウーレンシュピーゲル伝説』とH.クラウスの戯曲」

第40回

日時: 2012年9月30日(日) 13:00-17:00

場所: 西宮市プレラホール5F会議室

【合評】的場寿光「19世紀の視覚空間の変容と「フェナキスティスコープ」

【合評】中筋朋「ミシェル・ド・ゲルドロードにおける存在のモデルとしてのマリオネット」

【ベルギー現代小説翻訳準備会】鈴木[義]、井内、板屋、岩本

第41回

日時: 2012年11月11日(日) 13:30-17:30

場所: 西宮市大学交流センターセミナー室1

【発表】吹田映子「ルネ・マグリットの講演「生命線」と油彩画《彼岸—陰を経て光の下に見出す(生)のイメージ—」

【発表】三田順「ベルギーにおけるドイツ語文学—(境界地)におけ

るアイデンティティーの探求」

第42回(東京での研究会1回目)

日時:2012年12月27日(木)13:30-17:30

場所:一橋大学国際研究館4階大教室

【発表】小田藍生「フランスにおけるヴィクトール・オルタの受容」

【発表】杉山美耶子「ヤン・ファン・エイクのブルッヘにおける人的交流および制作環境に関する一考察—シント・ドナティアヌス聖堂を中心に」

【発表】三田順「ワロニーにおける象徴主義絵画—ヴェルヴィエ派とアンティミスム」



第42回研究会
(一橋大学)

ベルギー現代小説翻訳準備会

本研究会では2010年よりベルギーの文学作品を翻訳するプロジェクトを立ち上げ、「ベルギー文学」作品の翻訳出版を目指しています。

これまでオランダ語、フランス語、それぞれの作家を研究会でとりあげ、作品の読書会や試訳の共有などを行ってきました。2012年12月までの時点で本研究会で取り上げた作家、作品は以下のとおりです。

フランス語圏作家・作品紹介(統括:小林)

Amélie Nothomb<Ni D'Eve Ni D'Adam>(第29回、今中)

Xavier Deutsch<Victoria Bauer>(第29回、三田)

Madeleine Bourdouxhe<La Femme de Gilles>(第31回、岩本)

Francis Dannemark(第29回、的場)

オランダ語作家・作品紹介(統括:鈴木[義])

Hugo Claus “De Huis in de Struiken”(第29回、三田)

Jeroen Brouwers “Bezonken rood”(第40回、井内)

Herman Teirlinck “Het Japans masker”(第40回、鈴木[義])

Tom Lanoye(第21回、井内)

Anne Provoost(第29回、板屋)

Erwin Mortier(第31回、鈴木[義])

Annelies Verbeke(第31回、井内)

研究発表要旨

第30回研究会

鈴木義孝「「ベルギー」について—辞書での表記を中心に」

「ベルギー」という日本語での国名は、オランダ語、フランス語、英語、ドイツ語などのヨーロッパの言語での発音と異なっている。本発表では、日本語において、カタカナ表記「ベルギー」と漢字表記「白耳義」が、いつどのようにして使われ始めたのかということとその表記の変遷を18世紀後半以降、日本で出版された辞書での表記を中心にみていく。時代をさかのぼる形で、明治期の国語、英語辞書の表記を確認し、江戸時代に出されたオランダ語、フランス語、英語の辞書での表記へとさかのぼりつつ、「ベルギー」がどのように表記され、いつ使われ始めたのかということ考察する。また、漢字表記「白耳義」に関しては、19世紀半ばから20世紀にかけて中国で出版された英華辞書の表記の考察もあわせておこなう。

井内千紗「修辞家集団(rederijerskamer)について」

修辞家集団(rederijerskamer)とは、中世後期(15世紀～)ネーデルラント地方の各都市で活動した文芸サークルである。16世紀が最盛期といわれ、その時期にはネーデルラントのほぼ全都市に少なくとも一つの修辞家集団があったとされる。修辞家集団は戯曲

や詩を創作し、祝祭の場などで演劇を披露したり、その都市に来訪する高官を歓迎する行列や宗教行列、オメガングにも参加した。さらに3年に1度は各地の修辞家集団が集まり、ラントユウェール(landjuweel[地の宝])と呼ばれる演劇コンクールを開催していた。本発表では彼らの活動を当時の修辞家集団の様子を描いた絵画、版画等を参照しながら紹介し、当時の社会的影響力について考える。また、今日まで活動が継承されているブリュッセルの修辞家集団に触れ、フランデレンの文化政策における修辞家集団の現在の位置づけも紹介する。

第31回研究会

野崎次郎「Lara Fabianとベルギー的なるもの」

0) ララ・ファビアンはベルギー出身で、カナダでデビューし、その後フランス語圏、英語圏で支持されている歌手である。最初、フランスでデビューしようとしたが果たされず、カナダに渡り、デビューを果たし、支持層をヨーロッパから、ロシア、アフリカへと広げていった。

1) ララ・ファビアンの生い立ち。経歴が興味深い。ベルギー人の父(フランドル系)とイタリア人の母(シチリア系)とのあいだにベルギーで生まれ(1970)、5歳までシチリアで過ごし、8歳の時から10年間、ベルギー王立音楽学校で音楽を学び、1991年からケベックに渡り、そこで市民権を得、自分自身のレーベルを立ち上げた。マルチ・リンガルな状況に育った、複言語・複文化の人のといえる。

1-1) ララ・ファビアンはSerge Lama (1943-, Bordeaux) の曲 'Je suis malade'(1973)(私は病気)をカバーしている。この曲は Dalida がカバーすることで有名になったが、ララ・ファビアンのカバーで圧倒的に人気が出た。この3人の歌を聞き比べ、ララ・ファビアンのイメージをまずつかんでもらいたい。

1-2) 'Je suis malade' を YouTube で聞き比べる。Dalida, Serge Lama.

1-3) デビューの頃。フランスでデビューしようとしたがかなわなかった。なぜなのか? そこにベルギー性が見られるか?

2) 世界的なデビューのきっかけとなった 'La différence'(違い)と「文化多様性条約」(2005) マイノリティーへの敬愛。

2-1) 多言語・多文化主義 ある社会にいくつもの言語・文化が並存。

複言語・複文化主義 ある社会にすむ個人がいくつかの言語・文化を理解。

第32回研究会

木戸紗織「多言語社会ルクセンブルクにおける言語使用 ―領域を手がかりとして―」

ルクセンブルク研究は歴史の浅い分野だが、一昨年ワルシャワで開かれた世界ゲルマニスト会議において「ルクセンブルク学」として一つのセクションが設けられるほど体系化されてきた。日本には少なくとも5名の研究者がおり、言語学的にはルクセンブルク語の正書法および語の屈折に関する研究、教育面では移民的背景を持つ児童の教育に関する研究、そして社会言語学的な側面から言語法と国民意識に関する研究など、その対象は多岐にわたっている。こういった研究は、まず『ルクセンブルクは多言語社会だ』という認識の上に成り立っている。確かにルクセンブルクは三言語を話すという点で多言語国家ではあるが、しかし逆にヨーロッパで多言語国家といえ、ルクセンブルクではなく、多くの場合スイスやベルギーが挙げられる。そこで、本発表の目的は、第一に、多言語国家としてしばしば言及されるスイスやベルギーと比べて、ルクセンブルクの多言語性にはどのような特徴があるのか、そして第二に、従来の多言語社会に関する研究と比べてルクセンブルクの研究はどのような意義があるのか、を検討することである。

石部尚登「ベルギーにおける言語政策と言語の領域性認識の関係」

ヨーロッパで人々の言語観を長らく支配してきた言語の領域性認識は、古くは国民国家建設のための国民統合政策、多言語国家では言語対立を調停するための政策、また近年では地域語や少数言語の復興政策など、様々な形で、多くの国々で政策に取り込まれてきた。なかでもベルギーは、20世紀の前半より言語政策で言語の領域性に中心的な役割を与えてきた。現在では国家制度の基礎となっているほどに、両者の結び付きが強い国家である。本報告では、そのベルギーの言語政策を事例として、両者の関係が、単に言語の領域性認識が政策利用されるだけのものではなく、それが政策的な実体とされることで、その認識の構造自体に変化がもたらされる相互作用的な関係であることを示す。具体的には、言語の領域を確定する際に必然的に生じる言語境界線に着目し、ベルギーの言語政策における言語境界線の政策的利用の歴史、およびそれに伴う言語領域性の認識の変遷を考察する。

大場茂明「ハンブルク・ザンクトパウリにおける地区再生 —衰退地区からトレンドィ・エリアへ—」

人口総数の減少、高齢化率の上昇にともなう都市の縮退(Shrinking City)現象への対応は、欧米の先進工業国における共通の政策課題として近年注目されている。ドイツにおける都市縮退問題の認識は、「東の縮退」から「西の縮退」へ、さらには「成長地域での地区縮退」へと、その焦点が今日では徐々に移行しつつある。しかも、ミクロレベルで見れば成長と縮退は隣り合わせであり、衰退コミュニティが市内の特定地域にモザイク状に出現する一方で、かつての衰退地区がそのイメージを一新し、再び活き活きとした街の賑わいを取り戻したケースも、少数ながら存在している。本報告では、そうした事例の一つであるハンブルク市、ザンクト・パウリ(St. Pauli)地区を対象にして、典型的なインナーシティの衰退現象がみられたこの地区が、広告業・IT産業従事者、芸術家、ジャーナリストといったクリエイティブで所得の安定した若者や学生層に人気のトレンドィな地域(ドイツ語では“Szenenviertel”)として再発見・活性化されていく過程の中で、行政や地元関係者(アクター)が行った取り組みを考察していくことを通じて、都市縮退時代におけるコミュニティ再生のあり方を改めて検討するものである。

第33回研究会

加来奈奈「16世紀平和条約における南ネーデルランドが担う“仲介国家”についての考察—1529年カンブレ平和条約施行における交渉人ジャン・ド・ル・ソーの機能—」

16世紀前半のネーデルランドは神聖ローマ皇帝カール5世の支配のもと、その中央機関から派遣された使節は、フランスやイングランドとの外交交渉で重要な役割を果たした。近年では、彼らについて神聖ローマ帝国大使やスペイン大使といった視点からでなく、ネーデルランド大使といった視点で彼らの活動や帰属問題についての研究がなされている。外交の定義が不明瞭な時代であるということや、ネーデルランドの領域的立場の曖昧さから、ネーデルランドからの使節を外交官としての職務を厳密に論ずるより、“仲介人”または“交渉人”としての機能に注目したい。1529年神聖ローマ皇帝とフランス王との間にカンブレ平和条約が結ばれた。その施行のために派遣されたネーデルランド使節ジャン・ド・ル・ソーの任務を検討することで、彼がネーデルランド中央機関の代表者として、皇帝とフランス王との間を仲介した一つの役割をみることができる。

第34回研究会

中筋朋「メーテルランク的一幕劇にみる19世紀末の〈劇〉の質的変化—「日常の悲劇」と筋の内面化をめぐる—」

モーリス・メーテルランクが1890年代に発表した一幕劇は、現代演劇を考えるうえでも非常に示唆的である。これらの短い戯曲は20世紀後半になってからあらためて注目されるようになり、2002年にはテクノロジーを駆使した生身の役者を用いない上演もおこなわれ話題になった。メーテルランクの初期の劇作品は、イプセン、ストリンドベリらの戯曲とともに19世紀末の「ドラマの危機」を体現した作品として再読されてきた。本発表では、メーテルランクの作品のみを対象とすることでより精緻な分析をおこない、一幕劇が単なる劇の長さの変更ではなく、劇の筋の質的な変化であることを明らかにしていく。それを通じて、19世紀末の演劇の変化を「ドラマの危機」—ひいては終焉—ではなく、「ドラマの変容」として捉えなおす。具体的な作品としては『忍び入るもの』、『群盲』(ともに1890年)、『室内』(1894年)をあつかい、「静劇」と称されるこれらの作品から、逆説的な動性をひきだしていく。

的場寿光「ラウル・セルヴェ『タクサンドリア』—「偽りのイメージ」から「運動=イメージ」へ—」

1832年、ベルギーの物理学者ジョゼフ・ブラトーによって発明された「フェナキストスコープ」は、網膜残像とストロボ効果によって静止画があたかも動いているようなアニメーション効果を生じさせるものであった。映画及びアニメーションの原理とも見なされるこの装置は、そのギリシア語の語源(« fausse image »「偽りの映像」)が示すように、観るものを大いなる驚異をもって幻惑した。ベルギーを代表する現代アニメーション作家ラウル・セルヴェを魅了し、創作の原動力となっているもの、この「不動のもの」によって生み出される「運動」への単純な驚きであるといえよう。アラン・ロブ＝グリエとの共同シナリオによる『タクサンドリア』で、主人公の少年が描き出す幻想的な世界には時間が存在しない。この「永遠の現在」の単調さを逃れようという少年の欲望は、不動のイメージから運動=イメージへと向かうアニメーションの原理そのものと重なり合っているとと言えるだろう。

第35回研究会

三田順「カーレル・ヴァン・デ・ウースティネとヴランデレン・アイデンティティー」

ベルギーにおいて象徴主義はフランス語話者の間で積極的に受容され、象徴主義の生まれたフランス以上の盛り上がりを見せるが、そこで大きな役割を果たしたのがフランス人にとっての「北国」であるベルギーの作家の作品が醸し出す「北方性」であり、これはフランス文学に対するベルギー・フランス語話者文学のアイデンティティーの重要な拠り所となっていた。他方、フランス語話者に十年余り遅れて登場したオランダ語圏の象徴主義を代表するカーレル・ヴァン・デ・ウースティネはそうした地域性に否定的な見解を示し、ベルギー象徴派を高く評価していない。本発表ではこのヴァン・デ・ウースティネの作品に、ベルギーにおけるオランダ語話者としてのアイデンティティーと結びついた地域性が指摘できないのかを探る。

井内千紗「19世紀後半ブリュッセルにおけるフランデレン文化の振興—王立フランデレン劇場設立をめぐる—」

王立フランデレン劇場 (Koninklijke Vlaamse Schouwburg) は1887年に設立され、ベルギー独立後初めてオランダ語の専用劇団をもったブリュッセルの劇場である。この劇場は当時の国王レオポルト二世が王室史上初めてオランダ語で演説を行った場所でもあり、ブリュッセルにおけるフランデレン運動の一つの成果を示している。ブリュッセルでは1850年代以降、カツ、ヴァンデ・サンデおよびミュルダースの主導によって、オランダ語の作品を上演する劇場に対し公的援助を求める運動が次々と起こった。3人の運動はいずれも失敗に終わったが、1860年にブリュッセル市長の要請で始まった二言語併用を原則とする「国民劇場(Nationaal Theater)」構想に、1869年以降大きな影響をあたえることとなる。そして最終的には1887年にブリュッセルの助成を受けて「フランデレン劇場」が、その完成型として誕生する。本発表ではブリュッセル市がベルギー国民のための劇場創設を目指した結果、フランデレン劇場を設立するに至ったその過程に注目することで、当時のブリュッセルにおけるフランデレン文化振興の一側面を見ていく。

ハネ・オステイン「現代ベルギーにおける〈tussentaal〉について」

ベルギーのオランダ語は転機を迎えている。オランダ語でも立場や出身地によって言葉遣いは当然異なるが、ベルギーでは現在この使用域に大きな変化が認められる。オランダとベルギーではもともと同じ標準オランダ語が使用されているが、口語レベルではオランダのオランダ語とベルギーのオランダ語の差違が広がってきている。

本発表では、まずベルギーにおけるオランダ語の標準語化の歴史とその際影響を与えた要素について概説する。その後、現在のベルギーで広く使用されている「tussentaal」という現象を取り上げ、この言語の有する新しい使用域の特徴を解説する。そしてテレビの字幕を例に、「tussentaal」の発展が実際にどのように反映されているのかを考察し、この現象を巡るオランダ語学者の様々な見解、および今後の展望を紹介する。

第36回研究会

大迫知佳子「ベルギー王立図書館「F. J. フェティスコレクション」所蔵の資料について」

フランソワ＝ジョゼフ・フェティス (François-Joseph Fétis 1784-1871) は、19世紀に活躍したベルギー出身の音楽家である。フェティスは、1832年に設立されたブリュッセル音楽院の初代院長として、体系的な音楽教育の確立に尽力する傍ら、宮廷礼拝堂楽団の楽長、音楽理論家、作曲家、音楽学者、歴史研究者、批評家として独立後のベルギーの音楽文化再興をほとんど独裁的に成し遂げた。彼が生涯、自身の研究のために収集した蔵書は、彼の死後ベルギー政府によって購入され、ベルギー王立図書館音楽部門に「F. J. フェティスコレクション」として整理・保存されている。

本発表は、フェティスが著した理論教科書を巡ってなされたパリ・ブリュッセルにおける理論家達の対立の要因を解明するために、2012年2月に実施した王立図書館への調査報告である。中でもとりわけ、フェティスの手稿譜と、ルイジ・ケルビーニ著『対位法とフーガ教程』(1835年)内に複数添付された筆者不明のメモとの関係について、検討を行う。

今中舞衣子「ポール・オトレの思想とムンダネウム」

国際十進分類法の考案者のひとりであり、情報科学の父とよばれるポール・オトレの思想は、ながらくのあいだ不当に無視されてきた。知識そのものの編纂ともいえる彼の壮大な実験は、ル・コルビュジェら複数の建築家が関わり構想された世界都市計画を例として、衰退の歴史を辿ってきた。

ところが最近になって、関連資料のアーカイブ・展示室としてベルギーのモンスに現存するムダネウムがグーグルと協力関係を結ぶなど、インターネットの予言者としてのオトレの思想が注目されはじめている。

本発表では、オトレの先見的な思想と多岐にわたる活動を、ムダネウムで入手した資料および参考文献をもとに概観する。そして、オトレの20世紀前半の「衰退」の理由と21世紀インターネット時代における「注目」の理由を、知識の共有と情報のハイパーメディア化という視点から考察する。

正林朝香「ヨーロッパにおける多様性の『尊重』と『管理』」

「多様性の中の統合」(united in diversity)を標榜し、法の支配のもと自由で平等な共同体の構築を目指してきたヨーロッパは、域内に抱える様々な次元の文化的多様性の問題にどのように対処しようとしてきたのか。最近のヨーロッパでみられる明らかに不寛容な異文化への姿勢は、その理念を放棄したことを表すのだろうか。

本報告では、ヨーロッパが抱える多様性の問題を整理し、近年深刻な問題となりつつある領域的背景をもたない文化に対する欧州の扱いを、これまでの領域に根ざした文化の多様性の扱いと比較検討する。EUで進む移民政策の共通化が、現実には入域管理政策の共通化にほぼ限定されている現状と、社会統合政策の不備がもたらす各国における移民への不寛容な動きの連鎖に焦点をあて、ヨーロッパにおける多様性の尊重と拒絶の相克を明らかにしようと試みる。

第37回研究会

野崎次郎「ベルギーと言語戦争 La Guerre des Langues en Belgique」

「現在のベルギー」では北部のオランダ語地域と南部のフランス語地域との間で「言語戦争」が起きていると一般には説明されている。しかしその実態はどのようなものなのだろうか。そこにいたる歴史的経緯はいかなるものだったのか。その再確認を踏まえながら、そもそも「一国」における「公用語」「国語」とはなんであるのか、さらに「一国」とは言語にとってどのような制度であるのか、言語との関係で「一国」の存在を考えることの有効性はどのような限りでなのか、などについてアプローチしたい。

「一国に一国語」という考えが近代の「国民=国家」の時代では一般的とされているが、ここには陥穽はないのか。多言語・多文化社会状況が進展しつつある「地球規模での人的移動の時代」「移民の時代」ともいうべき21世紀において、それはどのような問題として提起し直されるであろうか。EU統合。東アジア共同体。そのような時代において言語教育はどのように進められねばならないのだろうか。このような視点からは複言語・複文化の個人の育成が目指されるべきであろうか。

フランス語が他の言語と並ぶ一言語 (une langue parmi d'autres) であるという視点とともに、他方で、フランス語は特権的言語 (une langue privilégiée) としての役割を歴史的に果たしてきた。フランス革命、「歴史的ベルギー」、「フランス現代思想」などなど。

以上のように一見矛盾して見えるかもしれない言語のもつ両面的な性格を尊重した言語教育が求められている、そのことをベルギーの事例が示唆しているように思える。

中條健志「「フランコフォニー」としてのベルギー—OIF(フランコフォニー国際機関)における活動からの考察—」

本報告の目的は、OIF加盟国(1970年～)としてのベルギーのこれまでの活動を、連邦議会でもなされた議論を資料として分析し、「民主主義や人権などの普遍的な思想とフランス語を分かち合う、世界中のあらゆる文化圏に属する国・地域の総体」として設立されたOIFにおいて、「フランス語圏」の地域であることがどのように主張され、「フランコフォニー」の組織化がどのように重要視されてきたのかについて考察することである。とりわけ、1986年から開催されているフランス語圏サミットへの参加をめぐる議論を事例とすることで、フランス語圏アフリカに対する、ベルギーの政治的な立場を明らかにする。

第41回研究会

吹田映子「ルネ・マグリットの講演「生命線」と油彩画「彼岸」——陰を経て光の下に見出す〈生〉のイメージ」

ルネ・マグリットが1938年に行なった講演「生命線」は、問答形式を備えた新たなイメージの探究方針がその中で表明されたという点において重要視されている。先行研究の多くはこの探究方針を取り上げてきたが、講演そのものが総体的にアプローチされることは

なかった。しかし近年ミシェル・ドラゲにより、「生命線」における〈光と陰〉の主題の存在が着目され、以後の創作をとおしたこの主題の展開を考慮に入れることによって「生命線」の重要性を捉える視点が示されている。本発表はこの視点を踏まえ、より包括的かつ詳細に講演原稿の内容を考察することで、原稿を執筆する過程においてマグリットがいかにか〈光と陰〉を主題化し、これを自らの創作の根本に位置づけようとしていたかを明らかにするものである。そのなかで浮かび上がるのは執筆と同時期に制作された油彩画《彼岸》の存在であり、そこに描き出された〈生(=光)〉の空間は「生命線」の基調をなすヴィジョンとして理解される。

三田順「ベルギーにおけるドイツ語文学—(境界地)におけるアイデンティティーの探求—」

ベルギーのドイツ語話者は総人口の一パーセント以下を占めるに過ぎないが、ドイツ語はオランダ語、フランス語と並ぶ公用語の一つであり、戦後ベルギーが連邦制へ移行するに当たって「ドイツ語共同体」が設立されたことで文化的にかなりの自治権を得ている。本発表ではベルギーとドイツの境界地であって20世紀に複雑な歴史を辿ったドイツ語地域の背景を紹介しながら、ベルギー・ドイツ語文学がどのように文化的アイデンティティーを獲得しようとしてきたか、その変遷を概観する。

第42回研究会

小田藍生「フランスにおけるヴィクトール・オルタの受容」

ベルギーの建築家ヴィクトール・オルタ(1861～1947年)は、人生の大半をブリュッセルで過ごし、作品の多くはベルギーに建造された。しかし、彼の評価は国内に限定されず、むしろ初期の評価の確立において重要な役割を果たしたのは、隣国のフランスであった。

本発表は、フランスにおけるオルタの受容を、当時、フランスで刊行された雑誌や本を中心に検証するものである。オルタの受容史を扱った先行研究は主立った批評をまとめた概論的な内容に留まり、細かな考察は行われていない。そこでこの研究では、より詳細に多くの批評をみていくことで、フランスにおけるオルタ受容の一連の流れを提示するとともに、その背景を明らかにしたい。

杉山美耶子「ヤン・ファン・エイクのブルッヘにおける人的交流及び制作環境に関する一考察—シント・ドナティアヌス聖堂を中心に—」

初期ネーデルラント絵画を代表する画家ヤン・ファン・エイク(1390年頃-1441年)は、ブルゴーニュ公フィリップ善良公の 宮廷画家兼侍従として、絵画制作および外交活動など諸種の任務にあたったと考えられる。しかしながら、彼の手に帰される現存作品中、制作年が判明している宗教画・肖像画は全て《ヘントの祭壇画》(1432年、ヘント、シント・バーフ大聖堂)を完成し、フランドルの一大都市・ブルッヘに居を定めたとされる1432年から、同地で没する1441年 の間に位置付けられる。この事実を踏まえるならば、未だ謎多き画家像に迫るためには、従来強調されてきた宮廷画家としての側面のみならず、その対概念として、都市における彼の足跡にも目を向ける必要があるだろう。本発表では宮廷画家としてのファン・エイクの活動を概観した後、ブルッヘ移住後の活動を考えるひとつの切り口として、彼が接触を持っていたシント・ドナティアヌス聖堂に注目する。都市の中心部に位置していた本聖堂は、社会的地位の 高いメンバーによって管理運営され、知的環境・芸術・パトネージという点でも注目すべき特徴を帯びていた。先行研究において看過されてきたヤン・ファン・エイクとシント・ドナティアヌス聖堂との関係を見直すことにより、都市における画家の人的交流・制作環境に新たな光を当てることが本発表の目的である。

三田順「ワロニーにおける象徴主義絵画—ヴェルヴィエ派とアンティミスム—」

本発表では、ベルギーのフランス語圏、ワロニー地方における象徴主義絵画の受容、展開に注目する。1830年 に誕生した若き国家ベルギーにおいて、首都ブリュッセルの文芸シーンをリードしていたのはフランス語話者化したゲルマン系ヴラーンデレン人であった。文化アイデンティティーを模索する中、ベルギー文化の独自性は、フランスに対する「ゲルマン性」に求められて行くが、ラテン系民族であるワロニー人にとって、このアイデンティティーは当然のことながら受け入れ難いものであった。

後に「ベルギー象徴派」として知られる作家、画家の大部分はブリュッセルを中心に活動した「ヴラーンデレン系フランス語話者」であったが、象徴主義はブリュッセルの文壇に対抗する手段として、まずワロニーで受容されている。本発表では、ブリュッセルに対してアイデンティティーを獲得するにあたり、ワロニーにおいて象徴主義がどのように受容されたかを概観し、ワロニーで展開した象徴主義絵画の見逃された側面といえる「ヴェルヴィエ派」に光を当て、そこで「ワロニー的」とされた要素を探る。

ベルギー関連刊行物リスト

本研究会会員によるベルギー関連の著書、論文をご紹介します(著者五十音順)。抜き刷り等ご希望の方は著者に直接ご連絡、または取次が必要な場合は井内までご連絡下さい。

* * * * *

■石部尚登

「ベルジシズムに対する規範主義的眼差しの今一言語的不安の発露としての規範主義」『言語文化学』14号、2005年、pp.5-18

「Belgicisms: critères de distinction et corrélation avec la classe sociale」『電子化言語資料分析研究2004-2005』大阪大学言語文化研究科、2005年、pp.43-50

「ベルギーの両共同体間の言語観の違いについて—方言の視点から見た言語政策研究に向けて」『批判的社会言語学の展開』大阪大学言語文化研究科、2007年、pp.33-45

「ベルギーのフランス語共同体における言語多様性について—多様性保護政策の下での内発的地域語とベルジシズム」『多言語社会研究会年報』3号、2007年、pp.50-70

「領域性の原理」と単一言語主義—フランドレンの言語政策のナショナリズム的側面について」『ことばと社会』三元社、12号、2010年、pp.154-77

「近年のベルジシズム擁護論とベルギーの規範主義的伝統」『埼玉学園大学紀要』10号、2010年、pp.245-57

『ベルギーの言語政策—言語と公用語』大阪大学出版会、2011年

「多言語主義と相互学習主義—ベルギーにおける第2言語教育から」『言語政策』日本言語政策学会、7号、2011年、pp.1-23

「ベルギーの「国内少数者」としてのドイツ語話者—その歴史的領域と現在の公的領域について」『Sprachwissenschaft Kyoto』京都ドイツ語学研究会、10号、2011年、pp.13-36

「研究ノート:ベルギーの新聞における「向こう側の共同体」の語られ方を語のネットワークから探る」『コーパスに基づく言語学教育研究拠点研究報告集』東京外国語大学、7号、2011年、pp.91-113

「地域語と学校—ベルギーのある自治体における新しい試みから」『ことばと社会』三元社、13号、2011年、pp.103-25

「ヨーロッパにおける「言語の領域性」—ベルギーの政策的言語境界線の生成と固定について」『多言語社会研究会大会年報』6号、2011年、pp.85-106

■井内千紗

「マイノリティ表象の場としてのコミュニティ・ラジオ—ブリュッセルのオランダ語ラジオ局、FM Brusselを事例に—」『言語文化学』Vol.19、大阪大学言語文化学会、2009年、pp.29-40

「ブリュッセルにおけるポストコロニアルな場所の変容—マトングはリトルキンシャサなのか—」『言語文化共同研究プロジェクト2009:ポストコロニアル・フォーメーションズ』大阪大学言語文化研究科、2010年、pp.23-34

「19世紀後半ブリュッセルにおけるフランドレン文化の振興—王立フランドレン劇場設立をめぐる—」『言語文化共同研究プロジェクト2011:ポストコロニアル・フォーメーションズ』大阪大学言語文化研究科、2012年、pp.73-84

■岩本和子

「ベルギーの舞台芸術政策—連邦国家の模索—」『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学部紀要)16号、2001年、pp.53-65

「ベルギーの言語法—連邦体制における言語文化的アイデンティティ—」『ヨーロッパにおける文化の交錯とアイデンティティ』平成10-13年度科研報告書(代表 橋本隆夫)、2002年、pp.63-70

「ベルギーの舞台芸術における地域性と国際性—<フランス共同体>のナミュール地方劇場を例として—」『国際文化学研究』第18号、2002年、pp.27-40

「ベルギーの舞台芸術政策と地方劇場の役割—<ワロニー・ブリュッセル共同体>新体制下のリエージュ—」『近代』第92号、2003年、pp.35-57

「ベルギー王立モネ劇場の歴史的役割(1)—社会改革とオペラ、『ポルティチのもの言わぬ娘』事件まで—」『近代』(神戸大学近代発行会)第93号、2004年、pp.31-58

■岩本和子(つづき)

「ベルギー王立モネ劇場の歴史的役割(2)―ワグナー受容から独自性の確立へ―」『国際文化学研究』第22・23号、2004年、pp.27-57

「ベルギー／ベルギーの言語法／解説」渋谷謙次郎(編)『欧州諸国の言語法―欧州統合と多言語主義―』三元社、2005年、pp.261-291

「ベルギーの多文化共生と文化政策」『芸術文化による国際交流の可能性―現状調査と実践的提言』(平成15-16年度神戸大学国際文化学部研究プロジェクト研究成果報告書 代表:寺内直子)、2005年、pp.7-18

「ベルギーのナショナリズム意識とくベルギー文学」『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学部紀要)、25号、2006年、pp.1-27

「〈ワーテルロー〉の文化的意味―ヨーロッパの歴史を変えた決戦地にて―」『ヨーロッパ文化のアイデンティティと民族意識―多言語・多文化世界のダイナミズム―』(平成15-16年度科研費補助金(基盤研究B2)研究成果報告書(代表 石川達夫))、2006年、pp.56-62

「モーツァルトとルソー―ヨーロッパ世界をつなぐ芸術家たち―」『モーツァルトがつなぐ東西ヨーロッパ―パリ～ブリュッセル～ウィーン』(モーツァルト「バステリアンとバステイエンス」レクチャー&室内オペラ公演記念論文集、岩本和子編)、2006年、pp.28-33

『周縁の文学―ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷―』松籟社、2007年

「ベルギーの「言語戦争」」『図書新聞』2008年1月1日号、2008年、p.3

「都市と文学―コルトレイクと『フランデレンの獅子』―」『EBOOK』(神戸大学仏語仏文学研究会)19号、2008年、pp.215-228

「モーリス・メテルランク『幼児虐殺』」『近代』(神戸大学近代発行会)104号、2010年、pp.81-94

「メテルランクにおける〈フランドル〉の記憶―『幼児虐殺』とブリューゲル―」『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要)35号、2010年、pp.1-40

「越境する芸術家ヒューホ・クラウス-民族の記憶と前衛性」『ヨーロッパにおける多民族共存とEU-言語、文化、ジェンダーをめぐる』神戸大学大学院国際文化学研究科異文化研究交流センター(IReC)2011年度報告書、2012年、pp.2-13

■加来奈奈

「ブルゴニー・ハプスブルク期のネーデルランド使節―「カンブレの和」実現に向けての活動を中心に―」『寧楽史苑』53、2008年、pp.17-34

「近世初頭ネーデルランドとイングランドの同盟―16世紀前半の経済および軍事を背景としたイングランド王の対応―」『奈良女子大学人間文化研究科研究年報』24、2009年3月、pp.51-63

「近世初頭ハプスブルク家の婚姻政策の中の女性―ネーデルランド総督マルグリット・ドートリッシュの権威―」『女性史学』19、2009年7月、pp.79-90

「(近世前半)ネーデルラントの統一と分離」大津留厚、水野博子、岩崎周一、河野淳編『ハプスブルク史研究入門―歴史のラビリンスへの招待』昭和堂、2013年刊行(予定)

■狩野麻里子

「ベルギー象徴主義における鏡」『大阪大学言語文化学、Vol.11』大阪大学言語文化学会、2002年3月29日発行、pp.17-31

「多言語国家ベルギーにおける芸術文化NPOとアートマネジメント教育～ブリュッセル・ファンタスティック国際映画祭の事例を通じて～」『アートマネジメント研究 第8号 2007』美術出版社、2007年11月20日発行、pp.68-81

「ベルギー王立美術館の教育普及活動～すべての人に開かれた美術館を目指して」『アートマネジメント研究 第9号2008』美術出版社、2008年11月20日発行、pp.74-87

■正躰朝香

「連邦制と行為主体の多様化―EU統合とベルギーの連邦化改革を事例に―」日本国際政治学会編『国際政治』第119号、1998年、pp.11-25

「EU統合の深化とベルギーの連邦化改革―連邦構成体の権限強化を中心に―」日本EU学会編『日本EU学会年報』第18号、1998年、pp.138-157

「ベネルクス三国―超国家的統合を目指す現実的調停者」坂井一成編『ヨーロッパ統合の国際関係論』(第二版)芦書房、2007年、pp.141-167

■ 正躰朝香(つづき)

「ベルギー政治の不安定化と連邦制—「非領域性原理」の後退から考える」『京都産業大学論集』(社会科学系列)第27号、2010年、pp.255-267

「ベネルクス三国」森井裕一編『ヨーロッパの政治経済・入門』有斐閣、2012年、pp.99-114

■ 吹田映子

「ルネ・マグリットにおける「見ること」の変遷—二つの《孤立した風景》を通して」『文化交流研究』第3号、筑波大学文化交流研究会、2008年2月、pp.11-34

「ルネ・マグリットの「太陽の時代」再考—光と夜、「見る」ことのシュルレアリスム」『フランス語フランス文学研究』第101号、2012年8月、pp.175-188

■ 中筋朋

「メーテルランク的一幕劇における『生の劇』の可能性—受動的感嘆が〈劇〉になるとき」『仏文研究』京都大学フランス語学フランス文学研究会、第38号、2007年、pp. 15-34

「19世紀末演劇論における役者の表現への両義的態度—身体の演劇性」『フランス語フランス文学研究』日本フランス語フランス文学会、第99号、2011年、pp. 195-210

■ 野崎次郎

「ブリュッセル旅行記」『関西大学西洋史論叢』第15号、2012年9月刊行、pp.57-62

■ 三田順

「ウィリアム・ドゥグーヴ・ド・ナンクと象徴主義—ベルギー象徴派における〈風景画〉の考察」『一橋論叢』132(3)(通号 767)、2004年9月、pp. 292-314

「ジョルジュ・ローデンバックと“北方性”—『組鐘奏者』に見るゲルマンとラテンの相克—」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』11、2007年3月、pp. 29-55

「ヴィルヘルム・ハマスホイと北方の象徴主義—グザヴィエ・メルリとの比較から—」『北ヨーロッパ研究』4、2008年7月、pp. 81-100

「ベルギー象徴派における文学と美術の照応—ジョルジュ・ローデンバックとグザヴィエ・メルリの比較研究—」『比較文学』51、2009年3月、pp. 21-35

« Comptes rendus: IWAMOTO (Kazuko), La littérature périphérique. Évolution du « nationalisme » dans la littérature belge d'expression française, Kyoto, Shorai-sha; 2007 », *Textyles - Écriture et art contemporain* (40) 2011, p. 415

「多言語国家ベルギーにおける文学史の諸相—脱構築的視点から見る〈ベルギー文学史〉の可能性—」『2011年度神戸大学異文化研究交流センター(IReC)研究報告書』2012年3月、pp. 41-54

「カール・ヴァン・デ・ウステイネとベルギー象徴派—ベルギー・オランダ語文学における象徴主義受容—」『北ヨーロッパ研究』8、2012年7月、pp. 83-93

「ヴァレンデレン象徴主義絵画における同時代性—ヴァレリーユス・デ・サーデレルの象徴主義的風景画を巡って—」『比較文化研究』105、2013年3月、pp. 177-190

■ 三宅拓也

「明治期の通商博物館設置計画にみる商品陳列所の受容」『博物館学雑誌』vol. 36, no.2、2011年4月、pp. 29-52 < <http://ci.nii.ac.jp/naid/40018922231> >

「大阪府立商品陳列所(1890年竣工)の建築について：近代日本における陳列所建築に関する研究 その3」『学術講演梗概集』F-2、建築歴史・意匠、日本建築学会、2010年9月、pp.519-520 < <http://ci.nii.ac.jp/naid/110008113615> >

■ 村中由美子

« L'Œuvre au Noir de Yourcenar et la peinture - autour de la genèse textuelle et de l'école flamande - » 『日本フランス語フランス文学会 関東支部論集』第20号、2011年12月20日発行、pp. 101-114.

« Motif du miroir et représentation de soi à travers L'Œuvre au Noir et Le Labyrinthe du monde de Marguerite Yourcenar » 『フランス語フランス文学研究』第102号、2013年3月発行(予定)

■ 矢追愛弓

「フェルナン・クノッフ作《愛撫》における夢と現実—画中の銘文の解説より—」『美術史』174号、2013年3月発行(予定)

◆◆2013年の活動予定◆◆

第43回研究会

日時: 2013年2月7日(木) 13:00-21:00

場所: 神戸大学ブリュッセルオフィス、ブリュッセル王立音楽院
(神戸大学国際文化学研究所異文化研究交流センター(IREC)、ブリュッセル王立音楽院と共催)

第一部(13:00-16:30頃)

場所: 神戸大学ブリュッセルオフィス

【研究発表】

- ・松井真之介「ベルギーにおけるアルメニア人コミュニティ」(仮)
- ・村中由美子「ユルスナールとファン・エイク — 『黒の過程』を中心の一」(仮)
- ・角本摩衣子(神戸大学文学部博士課程)「マニフェスタ9」(仮)
- ・ブレーク・アドリアーンズ(ヘント大学講師)
"Rolf Falter's "Belgium, a history without a country" and his view on Belgium as a stabilizing factor and the stimulator of the Flemish identity" (仮)

第二部(18:00-21:00)

場所: ブリュッセル音楽院

【講演】

三田順
"Belgian Francophone Literature at the End of the 19th Century"

【演奏会】

ブリュッセル王立音楽院声楽科学生(講師 正木裕子)
"Belgian Art Songs"

※2月9日(土)にはアルデンヌ地方への小旅行も予定しています。

第44回研究会

日時: 2013年3月24日(日)

場所: 関西(会場未定)

調整担当: 石部

第45回研究会

日時: 4月下旬

場所: 関西(会場未定)

第46回研究会

日時: 2013年5月27日

場所: 神戸大学国際文化学研究所
(神戸大学IRECとの共催、日本フランス語教育学会による招聘)

【講演会】

Jean-Marie Klinkenberg (リエージュ
大学名誉教授)

その他

・2013年中にベルギー研究論文集刊行の予定
(編集: 岩本和子・石部尚登、
出版元: 松籟社)

募 集

1. 研究発表募集

研究会では、会員のみならずの研究発表を募集しています。

特にまだ発表をされていないかたには自己紹介も兼ねて、なるべく早めにご発表いただきますようお願い申し上げます。

また、会員のみならずには発表の司会を事前にもお願いすることもありますので、その際にご協力のほどよろしくお願いいたします。

<発表要領>

調整担当: 岩本

※回によって調整担当者が変更となる場合がございます。

発表時間: 最長1時間(質疑応答2、30分)

分野: 不問。

発表予定の方は、指定の期限までに発表要旨(500字程度)の提出をお願いいたします。

要旨の例は本研究会ホームページおよび本会報6-11ページをご参照下さい。

2. 次号「ベルギー研究会会報」掲載記事・コラム募集

次号より、ベルギーに関する記事やコラムを掲載する予定です。ベルギー滞在中の会員の方からの最旬情報や書評、美術批評など、掲載記事を随時受け付けております(次号は2013年12月発行予定)。

3. 会員募集中

研究会の活動拠点は関西にありますが、会員は国内外問わず募集しています。お知り合いでベルギー関連の研究をされてるかたがいらっしゃいましたら、是非本研究会をご紹介ください。

入会受付窓口: belken040807@gmail.com

(担当: 井内)

ーベルギー研究会事務局(2012年度)ー

ベルギー研究会事務局を神戸大学国際文化学研究所岩本研究室に設置しています。現行の事務局各担当者は、下記のとおりです。

事務局長	岩本和子
運営・企画	中條健志・三田順
HP・論文集担当	石部尚登
会報・ML担当	井内千紗
会計	今中舞衣子
翻訳プロジェクト統括	小林亜美・鈴木義孝

ベルギー研究会 会報 創刊号
Newsletter of Japanese Association for
Belgian Studies, vol.1

発行日: 2013年1月15日
発行: ベルギー研究会
編集: 井内 千紗
事務局: 神戸大学大学院国際文化学研究所、岩本研究室内
Website: <http://www40.atwiki.jp/kbek/>